

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

——類義語の意味関係変化の一類型として——

土居 裕美子

目次

- 一 はじめに
- 二 和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味関係
- 三 通時的考察
 - 1 奈良時代
 - 2 平安時代和文
 - 3 平安鎌倉時代漢文訓読文
 - 4 室町時代
- 四 まとめ

一 はじめに

本稿は、山や道の傾斜や起伏の激しいさまを表す類義の形容詞「ケハシ」「サガシ」を取り上げ、意味関係の通時的変化とその要因を明らかにすることを目的とする。⁽¹⁾その上で、類義語の意味関係変化のパターンの一類型として、今後の語彙史研究に位置づけたい。

手順としては、まず比較的用例の多くみられた、鎌倉時代を中心とする、いわゆる和漢混淆文において両者の意味用法を比較し、基本的な意味関係を考察する。次に奈良時代から室町時代を通じての意味関係の変化を通時的に捉え、その変化の要因について考察を加える。

具体的な分析に入る前に、まず、同一の文脈でありながら表現が揺れたものを例として、両者が類義関係にあることを確認する。

○ここに西塔の住侶、戒淨房の阿闍梨祐慶といふ悪僧あり。(中略)人はかはれども祐慶はかはらず、さき興かいて、長刀の柄もこしの轆もくだけよととるまゝに、さしもさがしき東坂、平地を行が如く也。(寛一本平家物語 巻第二 一行阿闍梨之沙汰)

屋代本 サカシキ	平松家本 ケンキ	百二十句本 ケンキ	延慶本 サカシキ	長門本 さかしき
-------------	-------------	--------------	-------------	-------------

表に示したように、寛一本平家物語「さがしき」の部分に対応する箇所、諸本によって「ケハシ」「サガシ」の両形が用いられている。⁽²⁾ また、鎌倉時代訓点資料において、白氏文集「大行路」の「嶮」の字に「ケハシ」「サガシ」両方の訓が付される。⁽³⁾

○行路の難(キ)こと〔於〕山よりモ難ク〔於〕水よりモ嶮なり〔角サカシ〕〔イ サカシ〕〔左 ケハシ〕(神田本白氏文集 巻第三 198)

○行路の難ナルこと 於山ヨリモ、^{カタク} (難) ^{ケハシ} 嶮於リモ水(天理本白氏文集 巻三 395)

これらの例から、両者が少なくともこの文脈においては極めて近い意味を表す語であると考えられる。すなわち、同一文脈の同内容を表現した点において、この二語には共通する意義特徴があり、類義関係にあることが確認される。

二 和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味関係

表1 出現状況は次の表1のようになる。⁽⁴⁾

唐物語	1	1									ケハシ
光言句義釈聴集記											サガシ
海道記		4									読みが不明のもの
閑居友	1										
方丈記											
図書寮本 宝物集											
打聞集											嶮1
古本説話集	1										
法華百座聞書抄	1	4									
三教指帰注	1										
金沢文庫本仏教説話集											嶮1
今昔物語集											嶮9 嶮8 嶮1 嶮1
往生要集(西南院蔵)		1									
観智院本 三宝絵詞											

* 尊經閣文庫本……さかしくて

* 清水浜臣校本……はげしくさかしくて

② うしろよりかきすくひて、とぶやうにして出でぬ。あきれまどひて、いかにもおぼしわかぬほどに、おそろしげなる物来集ひて、はるかなる山の、けはしく恐ろしき所へ率て行て（宇治拾遺物語 卷十二—二十一）

③ 人ノ心住所ニ似タル事如シ随テカ水之器ニト云ヘリト居於高嶺ニ鎮ニケハシキ坂ヲ上リ下レハ衆徒ノ心武ラシテ嬌慢ヲ為先ト * 「ハケシキ」を「ケハシキ」に反転（延慶本平家物語 第一本 85ウ）

それぞれ、山、坂を「ケハシ」としたものである。

(2) 道中

次に、具体的な地形ではなく、行き来する道中の様子を形容するものがある。

④ 誠ニ、輪廻、生死ノ遠キ道ニハ、悪業煩惱ノ、コラウヤカンイカハカリカハミチノ、テ候ラム。三途八難ノサカシクケハシカラム道ヲスキテ、一乗无二ノ寶所ニイタラム事ハ（法華百座聞書抄 ウ・286）

⑤ ついに天竺にそわたりたまひにける（中略）玄奘、法顕などの昔のあとにおもひあはするにも、さこそはけはしくあやうく侍りけめ、とあはれなり（閑居友 一〇・5）

⑥ 老たるも若きもうしろのみかへりみて、さきへはす、みもやらざりけり。或は磯べの浪枕、やえの塩路に日をくらし、或は遠きをわけ、けはしきをしのぎつゝ、駒に鞭うつ人もあり、舟に棹さす人もあり（寛一本平家物語 卷第七 福原落）

用例④法華百座聞書抄の例は、「サガシ」と共に用いられている点で注目される。これは法華經の化城喻品について述べる部分で、「輪廻、生死の遠き道」「三途八難の道」とあるように、抽象性の高い道中である。後に考察する「サガシ」の用例が集中的に見られる部分でもある。用例⑤は、天竺への道中を形容するものである。用例⑥も同様に、形態としての具体的な地形の様子ではなく、その道中の厳しさを言うものである。

(3) 波・水流

波や水の流れを形容するものが三例存する。用例は以下のようになる。

⑦時ニ大海(ノ)中ニ大ナル蓬萊山アリ、此(ノ)山ニトツカントスルニ海ニケハシキ波鱗ヒレヲフルテ山へ船ヲチカツケス(三教指帰注 十六オ6)

⑧ソノ瀧ハヲフヒカ瀧ナントノ様□テソレヨリモ誠ニケハシ 瀧へ正ク筏ノヲチ入時ニ當テ(明恵上人夢記 四11)

⑨天流と名付たる渡りあり。川深く流れけはしきと見ゆる、秋の水みなぎり来りて舟の去る事すみやかなれば往来の旅人たやすくむかひの岸につきがたし。(東関紀行 16・8)

*群書類従本……はけしくみゆ *正保五年版本……おそろしきと見ゆ

用例⑦は、高い山の様子を波にたとえる発想からの表現である。用例⑧⑨は、形態的な波の高さだけでなく、滝や川の流れの激しさを言うものである。

(4) 天候(風)

天候、具体的には風の吹く激しさを形容するものが一例存する。

⑩いまはむかし丹後の國は北國ト雪ふかく風けはしく侍る山寺に觀音驗し給(ふ)(古本説話集 148・10)

(5) 世間・人の心

更に、比喩として世間や人の心について用いられるものが三例存する。

⑪かの巫峡の水の流れ思ひよせられて、いとあやふき心ちすれ。しかはあれども、人の心にくらぶれば、しづかなる流ぞかしと思ふにも、たとふべきかたなきは、世にふる道のけはしき習ひなり。

この川のはやき流れも世の中の人々の心のたぐひとは見えず(東関紀行 16・14)

⑫大方世ニアル道ノワツラハシク振舞ニクキ事、薄氷ヲ踏ヨリモアヤウク、ケハシキ流ニサホサスヨリモ甚キ物ナリ。

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

(十訓抄 二88・10)

⑬車ヲ摧ク道ヨリモ、人ノ心ハサカシク、舟ヲ覆ス水ヨリモ人ノ心ハケハシト申候也。(新樂府注 49・12)

用例⑪は、水の流れの激しさから、世間の厳しさを連想したものであり、用例⑫は、世間の厳しさを水の流れに例えた表現である。また、用例⑬は、先に触れた、白氏文集の「大行路」を言うもので、ここでは「サガシ」と対句で用いられている。

以上の十三例が、現在得られた「ケハシ」の全用例となる。これらをまとめたものが次の表2である。

表2 「ケハシ」の形容する対象

計	3	3	3 (2)	1	3
	坂	山	山	道	天竺へ
	福原落				
		流	瀧	波	
		〈水〉	〈流〉		
				風	
		世に経る道	世にある道	人の心	

同様の観点から、次に「サガシ」を分類する。

《サガシ》

(1) 地形

まず、具体的な地形を形容するものとしては、次のようなものがある。

①賢人の世をのがるゝといふは、廻生木の如し。彼木は深谷のさがし所に立たれば、下よりも道なし。上よりもたよりなし。(平治物語 212・7)

②其後蜀國ノ人此牛ヲ見テ、石牛天ヨリ下テ金ヲ下セリト思ヘリ。則五人ノ力人ヲシテ山ヲ掘リ牛ヲ引クニサカシキ山平ケル道ニ成ヌ。(十訓抄第七 48・8)

③鞍馬へ御幸なる。(中略)篠の峯、薬王坂な(シ)ど申さがしき嶮難を凌がせ給ひて横河の解脱谷寂場坊、御所になる。(覚一本平家物語 卷第八 紺搔之沙汰)

④石巖のさかしきをきりはら(ツ)て新なる道場を造り、父の御為と供養じて、勝長壽院と号せらる。(覚一本平家物語 卷第十二 山門御幸)

深谷、山、篠の峯、薬王坂、石巖などを「サガシ」とするものである。

(2) 道中

次に、具体的な地形だけではなく、道中の厳しさを表すものには、次のようなものがある。

⑤もしひとをこりの心たかければほうのみついらす もしよきしをく京すれはくどくこれにかなへり 二はとう行のともになかしきをわたるかことくにすへし たかひにあひはけめ(高野山西南院蔵 往生要集 42・5)

⑥喩トハ諸ノ人アリテ財ヲモトメムカタメニ五百由旬ノサカシクトキ道ニムカヘラム。(法華百座聞書抄 ウ27)
先に触れたように、用例⑤法華百座聞書抄の例は、化城喩品について述べたもので、この文献での「サガシ」の全用

例がこの一連の箇所に見られる。具体的な地形の險阻なさまだけではなく、その道中の様々な厳しさを含んだ表現である。

(3) 波・水流

波や水の流れを形容するものとしては、海道記の二例がある。

⑦ 天中川^ラ渡^レハ大河^{ニテ}水ノ面三町アレハ舟^{ニテ}ワタル水早ク波^{サカシクシテ}棹^モエ指エネハ大ナル杙^ヲ以^テ横ニ水ヲカキテ渡ル(海道記 16オ5)

⑧ 播豆蔵宿^ヲ過^テ大堰川^ヲ渡ル此河ハ中ニ渡リ多ク水又サカシ流^ヲ越へ嶋^ヲ阻テ瀬々片々ニ分タリ(海道記 18ウ10)

(4) 世間・人の心

世間や人の心について用いられるものは、「ケハシ」との対句である、新薬府注の次の例のみであった。

⑨ 車^ヲ推ク道^{ヨリ}モ、人^ノ心^ハサカシク、舟^ヲ覆ス水^{ヨリ}モ人^ノ心^ハケハシト申候也。(新薬府注 409・12)

以上の用例を中心に、「サガシ」の形容する対象についてまとめられたものが次頁の表3である。

「ケハシ」の表2と、「サガシ」の表3とを、分類枠で比較すると、一例ではあるが、「ケハシ」だけに、天候を形容する例が存することが注目される。また、全体の割合で比較すると、「サガシ」の方が、地形を形容するものに偏り、逆に「ケハシ」は多くの分類枠に散らばっている。この二点を抽象化して次のようにまとめることができよう。

両者の比較において、「サガシ」は具体的なもののさま、すなわち、地形のように、目に見え常に形のあるものの形態を表し、それ以外の用法は、文献に限られる。一方、「ケハシ」は、天候の様に、目には見ええず、変化するものの様態や、さらには世間や人の心のような、より抽象的なものごとのさまをも表すと考えられる。

ただし、和漢混淆文において、「ケハシ」が風を形容するものは、管見に入る限りでは古本説話集の一例だけである。しかしながら、平安時代和文においても、「ケハシ」が風や雪のように、天候を形容する例が見られること、また、次の

表3 「サガシ」の形容する対象

	往生要集 法華百座 海道記 唐物語 平治物語 十訓抄 新樂府注 延慶本平家 覚一本平家	地形	道中	天候	世間・人心
計	14 （1）	山・道 山 深谷 山・峰 山・（道） 山・坂・谷 山・坂・峰 山・石巖	（道） （4）	波・水	
	2				
	1	人の心			

（ ）内は喩えられるもの

名語記の記述から、平安鎌倉時代において、「ケハシ」が風の激しさを表す用法を持つと考えられる。⁽⁵⁾

○問 風_{モケ}ハシ山_{モケ}ハシ如何 答 山嶮難峨々也 カケヒカセリノ反懸僻ノ義也（名語記 巻第八 43才）

次に、形容する対象に関わる問題として、比喩的な用法を取り上げる。この比喩的な用法は、大きくは二つに分けられる。一つは道中の厳しさへの転用、もう一つは、人心や世間の厳しさへの転用である。今仮に前者をA、後者をBとすると、Aは先の分類で形容する対象を「道中」としたものに該当する。発想としては、地形の険阻なさまから、そのような道を通る場合の物理的な行き来の困難さへ、さらには、必ずしも地形だけの問題ではない、道中の様々な厳しさへと転用されていくものである。それぞれ次の用例のようになる。

A 地形の険阻↓往来の困難↓道中の厳しさ

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

《ケハシ》

① 誠ニ、輪廻、生死ノ遠キ道ニハ、惡業煩惱ノ、コラウヤカンイカハカリカハミチクテ候ラム。三途八難ノサカシクケハシカラム道ヲスキテ、一乗无二ノ寶所ニイタラム事ハ（法華百座聞書抄 ウ286）

② 玄奘、法顯などの昔のあとにおもひあはするにも、さこそはけはしくあやうく侍りけめ、とあはれなり（閑居友 一 10・5）

③ 或は磯への浪枕、やえの塩路に日をくらし、或は遠きをわけ、けはしきをしのぎつゝ、駒に鞭うつ人もあり、舟に棹さす人もあり（寛一本平家物語 卷第七 福原落）

《サガシ》

④ もしよきしをく京すれはくときこれにかなへり 二はとう行のともにかかしきをわたるかごとくにすへし たかひにあひはけめ（高野山西南院藏 往生要集 42・5）

⑤ 如來ヲ遠クサカシキ道ノシルヘトシタテマツリテ一佛乘ノ寶處ニイタラシメムカコトシ（法華百座聞書抄 ウ283）
 ここで二点が指摘できる。一つは、Aに分類される「サガシ」の用例が、往生要集、法華百座聞書抄という、十世紀から十二世紀始めの、いわば平安時代に含まれる比較的早い時期の文献である点。もう一つは、その内容が化城喩品のように、仏教の教義に関わるものに限られているという点である。それに対して、「ケハシ」の場合は、法華百座聞書抄だけでなく、また仏教の教義に関わらない内容の部分でこのように転用されている。この点から「ケハシ」の用法が「サガシ」より広がったものと考えられる。⁽⁶⁾

次に、Bとしたものを見る。これは、人生を「旅」にたとえる発想を踏まえた上で、その旅の道中にあたるものを「世間」や「他人の心」と捉え、その厳しさを表現する言葉として「ケハシ」「サガシ」が用いられるものである。Aより更に抽象度が高い発想と言えよう。このようなものは、先にみたように、ケハシに三例、サガシに一例存する。

B 「道中」の敵しき↓「世間・人の心」の敵しき

《ケハシ》

⑥かの巫峡の水の流れ思ひよせられて、いとあやふき心すちれ。しかはあれども、人の心にくらぶれば、しづかなる流ぞかしと思ふにも、たとふべきかたなきは、世にふる道のけはしき習ひなり。

この川のはやき流れも世の中の人の心のたぐひとは見ず（東関紀行16・14）

⑦大方世ニアル道ノワツラハシク振舞ニクキ事、薄水ヲ踏ヨリモアヤウク、ケハシキ流ニサホサスヨリモ甚キ物ナリ。（十訓抄 一88・10）

《サガシ》

⑧車ヲ摧_ク道ヨリモ、人ノ心ハサカシク、舟ヲ覆_クス水ヨリモ人ノ心ハケハシト申候也。（新樂府注 409・12）

「サガシ」の一例は、用例⑧新樂府注の例で、「ケハシ」と対句になっており、結局、Bの用法の「サガシ」は、単独の例としては存しないことになる。

全体的に用例数が少ないので、考察には慎重を期すべきであるが、以上のA Bの現れ方から、「ケハシ」の方が「サガシ」より比喩的に用いられやすかったと考えられる。このことは、形容の対象が、「サガシ」は具体的な地形が中心だったのに対し、「ケハシ」が風のように常に変化するものも含んでいたことに通じる。つまり、変化する物の、その激しく敵しい動きを捉えて表現することのできる「ケハシ」は、目に見える具体的なものを形容するだけでなく、より抽象的なものを比喩的に形容する用法へと派生しやすかったのではないか。

次に、並列形態について考察する。それぞれと並列した形で用いられる他の形容詞を比較することにより、両者の差異を検討するものである。用例は以下の通りである。

《ケハシ》

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

- ① 三途八難ノサカシクケハシカラム道ヲスキテ、一乗无二ノ寶所ニイタラム事ハ（法華百座聞書抄 ウ286）
 ② 玄奘、法顯などの昔のあとにおもひあはするにも、さこそはけはしくあやうく侍りけめ、とあはれなり（閑居友一
 10・5）

③ おそろしげなる物來集ひて、はるかなる山のけはしく恐ろしき所へ率て行て（宇治拾遺物語 卷十二—二十一）
 《サガシ》

④ 蜀山といふやまはしくさかしくて、とたえかちなる雲のかけはしを歩わたらせ給（圖書寮本唐物語 卷第十八）

* 清水浜臣校本……はげしくさかしくて

⑤ 喩トハハ諸ノ人アリテ財ヲモトメムカタメニ五百由旬ノサカシクトラキ道ニムカヘラム。（法華百座聞書抄 ウ27）
 これら全ての用例を表にまとめると次の表4のようになる。

表4 並列形態について

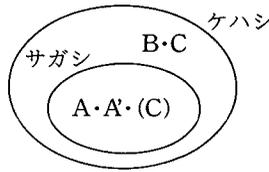
	前項	後項
ケハシ	サガシ	サガシ アヤフシ (危) オソロシ (恐)
サガシ	ケハシ トホシ ハゲシ (激)	ケハシ トホシ (遠)

表4に示したように、「ケハシ」は、状態を表す「サガシ」と、不安や恐怖の感情を表す「アヤフシ」、「オソロシ」と共に用いられるものがある。一方「サガシ」は、状態を表す「ケハシ」、「ハゲシ」、距離を表す「トホシ」と共に用いら

れる。「トホシ」も一種の状態性を表すものと捉えるならば、「サガシ」が並列して用いられるのは、状態性を表す語のみということになる。つまり「ケハシ」は、起伏や傾斜が激しい形態が及ぼす心理的作用としての、不安や恐怖の感情と結びつく方に用法が広がっているが、「サガシ」にはそのような用法の広がり認め難いと言えよう。

ここまでの考察をまとめると、和漢混濁文において、「ケハシ」は、次のような点から、「サガシ」より意味用法が広いと考えられる。第一に、具体的なものの形態だけでなく、より抽象的なものも形容することができる。これには、比喩として道中の厳しき、世間や人の心の厳しさを表す用法が見られることも含まれる。第二に、「ケハシ」は、そのような形態が及ぼす心理的作用である、不安や恐怖の感情と結びついて用いられる。このうち、第一の点に基づいて、両者の意味用法の関係を図示すると次の図1のようなことになる。

図1



- A 地形を形容する (地形の傾斜、起伏が激しいさま)
 A' 波、水流を形容する (波や流れの激しいさま)
 B 天候を形容する (風の勢いが激しいさま)
 C 抽象的事柄を形容する (道中・世間・人心の厳しいさま)

(和漢混濁文)

Aの、具体物を形容する点で両者は重なり、B・Cの、より抽象的なものを形容する点で「ケハシ」は「サガシ」より意味用法が広いと考えられる。Aにおける両者の重なり、特に地形が險阻であることを表す点においては、両者はほぼ同義の語と認識されていたと思われる。その結果、Aの意味用法の場合に限り、同一の文脈において「ケハシ」「サガシ」両形が現れることがあったのだと説明されよう。(7)

和漢混濁文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

三 通時的考察

次に、奈良時代から室町時代に至る文献における用例を通時的に比較し、「ケハシ」「サガシ」の意味用法の関係変化を捉える。なお、文体差も考慮することを予定し、平安鎌倉時代においては和文、漢文訓読文を調査した。

1 奈良時代

まず、奈良時代においては、管見の限りでは「ケハシ」は見出し得ない⁽⁸⁾。万葉仮名で表記された「サガシ」の用例は、①②のような歌謡にみられる。いずれも地形の險阻なさまを表すものである。

① 廻例符纏 耆資麼加多増塙 嵯峨紫彌台 區縫刀理我泥底 伊母我提塙刀纏

あられふる 杵島が岳をさがしみと 草採りかねて 妹が手をとる (逸文肥前國風土記 杵島)

② 破始多氏能 佐餓始枳椰摩茂 和藝毛古等 赴馱利古喻例麼 椰須武志呂箇茂

梯立のさがしき山も我妹子と二人越ゆれば安席かも (日本書紀 仁徳天皇 406)

2 平安時代和文

次に、平安時代和文における用例を見る。出現状況は次の表5のようになる⁽⁹⁾。

まず、「ケハシ」は、地形を形容するものが二例、天候を形容するものが三例、計5例見られた。

《ケハシ》

(1) 地形

① けはしき山のふところにて、松風のをとのみき、渡しならひたまへる、いと思ひかけぬさまに、なごりなくあくが

(1) 地形

⑥三年といふ年のほる、大きな峯にのぼりて、見めぐらせば、いたゞき天につきて、さがしき山、遙かにみゆ。(宇津保物語 俊蔭 一38)

⑦それより西をなほ行けば、さがしき山七有り。その山より仙人へ出てこしつ。(宇津保物語 俊蔭 一44)

⑧龍門、比叢、高間、壺坂、御獄詣忍びてまうで給ふ。さるまゝに、さがしき道をあゆみも知り給はず歩み給へば、御足腫れぬ。(宇津保物語 菊の宴 二67)

⑨さかしきやまこへいて、そおのくむまにはのるみきはのこほりをふみならすむまのあしをとさへ心ほそくかなし(源氏物語 浮舟 1881・12)

(2) 危険事

⑩(仲忠)「相樸の事、國くさかしき事有りて、今年は有ルまじとか聞き侍りつる。……」(宇津保物語 楼上 上 三49)

*延宝五年木版本他九大本系……さわ(は)かしき

⑪(惟光)「いそきくるものはきぬのすそをものにひきかけてよろほひたふれてはしよりもおちぬへければ『いてこのかつらきのかみこそさかしうしをきたれ』とむつかりてものゝそきのころもさめぬめり……」(源氏物語 夕顔 112・1)

⑫埋火のいきてうれしと思ふにはわがふところにいだきてぞぬる

とて、かき抱きて臥し給(ひ)ぬ。女君「いとさがしき事なり」とて笑ひ給ふ。(落窪物語 卷三 131・4)

*広島大学蔵四冊本……をかしきこと

「危険事」を表す「サガシ」は、三例とも会話文中に用いられている。このうち、用例⑩の宇津保物語では、九大本系の諸本で全て「さはがし」となっており、「サガシ」の確例とするには慎重を期すべきであろう。また、用例⑪は神の仕

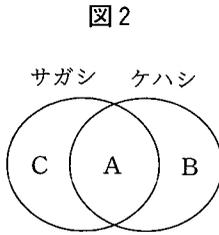
和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

業について、用例⑩は埋火を懐に抱くという歌を詠んだことについて言うもので、解釈によっては、「サガシ(賢)」の意味に取れるかも知れない。なお検討すべき点が残るが、現段階では、地形を形容することからの転用として、「人身に危険を及ぼすような状態」を表すものと考えることとする。

このような、和文における「ケハシ」と「サガシ」との関係について、その形容する対象を中心にまとめると次の表6のようなになる。すなわち、和文においては、図2に示したように、「ケハシ」が、風や雪の勢いの激しさを表す点、「サガシ」が人身に危険を及ぼすさまを表す点で、両者は弁別的であると言える。

表6 平安鎌倉時代和文における「ケハシ」「サガシ」の形容する対象

ケハシ	2	地形	道中	波・水流	天候	世間	危険事
サガシ	4						3



- A 地形を形容する(地形の傾斜、起伏が激しいさま)
 B 天候を形容する(風・雲の勢いが激しいさま)
 C 抽象的事柄を形容する(人身に危険を及ぼすさま)

(和文)

3 平安鎌倉時代漢文訓読文

次に、平安鎌倉時代漢文訓読文における用例の検討を行う。出現状況は次の表7のようになる。⁽¹⁾

表7

11			10			9		
知恩院蔵地蔵十輪經			東大寺蔵地蔵十輪經			唐招提寺本金光明最勝王經		ケハシ
不空羂索神呪心經			正倉院蔵地蔵十輪經			山田本妙法蓮華經		
東寺蔵不動儀軌			石山寺蔵佛説太子須陀拏經	1		小川本願經四分律		
法華義疏長保四年点			石山寺蔵沙彌十戒威儀經			西大寺本金光明最勝王經	1	サガシ
龍光院蔵妙法蓮華經			東大寺図書館蔵百法頌幽抄					
天理図書館蔵南海寄帰内法伝			法華經玄贊淳祐古点					
聖語蔵弁中辺論								

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

12

高山寺藏大毘盧遮那成佛經疏		
書陵部藏管見記紙背文選		7
立本寺本妙法蓮華經	1	
興福寺本大慈恩寺三藏法師伝	1	6
神田本白氏文集	1	2
広島大学藏八字文殊儀軌		
石山寺藏大唐西域記		8
天理本白氏文集	1	
高山寺本論語		
高山寺本史記		
高山寺本莊子		
天理本古文尚書		
天理本文選		

13

まず、両語形の量的な関係は、漢文訓読文では、全体的には「サガシ」の方が多く見られる。また、通時的に見ると、「サガシ」が九世紀後半の西大寺本金光明最勝王経から現れるのに対し、「ケハシ」の初出は、院政期頃の立本寺本妙法蓮華経まで降る。上代文献に「サガシ」しか見られなかったことと、和文でも和漢混淆文でも「サガシ」が先に現れることを考え合わせると、「サガシ」が古く、「ケハシ」が新しい、ということになる。

次に両者の意味用法について、形容する対象に注目し、分類すると次のようになる。

《ケハシ》

(1) 地形

① 聖賢、茲二由(リテ)往(カ)弗、氣寒(ク)土嶮シ、亦焉(ソ)念(フ)ニ足(ラム)ヤ「哉」(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝 卷第五 21)

(2) 道中

② 時に一(リ)道師有(リ)強識にして智想有(リ)明了にして心決定せり嶮シキに存(リ)て衆の難を濟フ(立本寺本法華経 卷第三 52・8)

③ 行路の難(キ)こと〔於〕山よりモ難ク〔於〕水よりモ嶮なり「角 サカシ」「イ サカシ」「左 ケハシ」(神田本白氏文集 卷第三 198)

《サガシ》

(1) 地形

④ 便是の念を作(さ)ク此崖は深ク峻設ひ百千人をして時三月を経とも亦断フルこと能(は)じ「末」(西大寺本金光明最勝王経 179・18)

⑤ 太子山の嶮岑を見れば嵯峨シクして樹木繁ク茂し(仏説太子須陀拏経 189)

⑥ 國(ノ)南(ハ)海ニ濱ス、秣刺邪山有(リ)、崖谷崇シク深シ、中(ニ)「有」白檀ノ香樹旃檀備婆樹有(リ)(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝 卷第四 154)

⑦ 山行二百餘里(にして)山に入(る)山路崎嶇シク谿往危険シ。(石山寺藏大唐西域記 卷第一 528)

(2) 教

⑧ 正法陵夷すと言「者」即(ち)是(れ)我が如来の所説の「之」教を正法と名(づく)「也」。高く峻(かし)きを陵と

和漢混淆文における「ケハシ」「サガシ」の意味用法について

曰(ふ)「也」。(百法顯幽抄 1476)

以上の分類をまとめると、次の表8のようになる。

表8 平安鎌倉時代漢文訓読文における「ケハシ」

「サガシ」の形容する対象

	地形	道中	波・水流	天候	世間	教
ケハシ	1	3	〈2〉			
サガシ	23	2	〈2〉			1

分類枠としては、和漢混淆文に見られた、天候、世間や人心を形容する例がない。また、仏教の教義について言うものが「サガシ」のみに存する。一例ではあるが、「サガシ」が「ケハシ」より早い時期に多くみられた全体の出現状況をも考え合わせると、この用例の存した百法顯幽抄の加点時期、十世紀中ごろの時点では、「ケハシ」よりも、「サガシ」の方が意味用法が広がったと考えられる。

4 室町時代

最後に、室町時代における用例を検討する。調査した文献と出現状況は表9の通りである。⁽¹²⁾

概観すると、量的には、今までと逆転し、「ケハシ」が多くなる。意味用法については、日葡辞書の、次のような記述が注目される。⁽¹³⁾

〈日葡辞書〉

Queaxij. ケウシイ (険しい) 山とか道とかかなどが険阻で、起伏がひどい(こと)。

例, Queaxij michi, yama &c. (険しい道, 山など) 起伏がひどい, 岩だらけの道や山嶽。

『比喻 Quenaxij fito. (険しい人) 厄介な、根性の悪い人。(490 r)

Sagaxij. しがしい (険しい). 険しくて登るのに骨の折れる (場所). 例, Sagaxij yama. (険しい山). 険しくそびえて
いる山. (548 r)

表9

閑吟集		ケハシ	サガシ
中華若木詩抄			
四河入海	2		3
毛詩抄			9
御伽草子	1		
詩学大成抄	9		
天草版平家物語	1		
天草版伊曾保物語			
虎明本狂言	2		

「ケハシ」の項に、「險阻で起伏がひどい」という記述と共に、「比喻」として、「厄介な、根性の悪い人」と、人の性質を形容する用法が記述されている。一方、「サガシ」については、地形に関する記述のみとなる。この時代の、両者の基本的な意味用法の違いは、この日葡辞書の記述で把握されよう。すなわち、「ケハシ」は具体的な地形と共に、人の性質をも形容することができるのに対し、「サガシ」は地形を形容するのみ、ということである。室町時代の文献から得られた用例を、分類した形で示すと次のようになる。

《ケハシ》

(1) 地形

① 「蜀道難劔閣崢」蜀ハ山国デ山ハカリテ山ノスルドニケワシイコトカ劔^{ツルギ}ノハノ如ナソ (詩学大成抄 二52ウ)

② ちらんしやうと申(す)山は、極めて高くけわしきなり。虎、野干のすみかにて、人さらに行き通ふなし。(御伽草子 熊野の御本地のさうし)

(2) 波・水流

③ 「故有風濤之險天限之分」險ハケハシイトヨムソ山ノケワシイ如ナ浪カアルソ (詩学大成抄 二27ウ4)

(3) 世間・人心

④ 「人間何處不巉巖」海中嶮ナルノミナラズ人間ノヨトコテモアレ嶮ニナイハナイソ チツトモ物ヲ云ヘハ人カソシ
ル程ニ世間ハケハシイソ カウ云ヘハ時世ノ事ハ可知ソ (四河入海 一の三 28ウ1)

(4) 動作・表情

⑤ (山伏) …… 一いのりこそはいのつつたれ、ほろおんくくくく (卜書) いぬわんくくといふてかみつかふとする
(中略) 犬ばうずにななつく山^{マコ}ぶしのかたへけしかくる、(山伏) あまりけはしうけしかけそ (卜書) いのる間はよく
とらへていよ (虎明本狂言 聳類山伏類 犬山伏)

《サガシ》

(1) 地形

⑥ 「但若江路峻常慙汲腰酸」坂カ遠テサカシキ程ニ水ヲ汲テカヘル腰カイタイソ (四河入海 八の四 11オ3)

⑦ 節彼——毛カ義ニハコ、ニ節然ト高サカシイハ南山テアルソ (毛詩抄 十二 2オ3)

「ケハシ」は、地形を形容する用例①②の他、用例③のように波を形容するもの、用例④のように、世間の巖しさを言

うもの、更には、用例⑤のように、「けしかける」という動作の激しき、厳しさを言うものがある。以上をまとめると、次の表10のようになる。

表10 室町時代文献における「ケハシ」「サガシ」の形容の
対象

		地形	道中	波・水流	天候	世間	動作表情
ケハシ	11			2		3	1
サガシ	12						

日葡辞書の記述と合わせると、室町時代以降、「ケハシ」は、物の形態から、人の動きや性質をも表す方向へと、意味用法を広げたと考えられよう。一方、「サガシ」は、地形を形容するだけの語として存在することとなる。すなわち、「ケハシ」に「サガシ」が取り込まれた関係になる。

三 まとめ

奈良時代からの大きな流れを概観すると、「ケハシ」「サガシ」の意味関係の通時的変化は、図3のようになる。「ケハシ」はAの部分の重なりを中心として「サガシ」を取り込み、比喩・転用を契機として意味用法を広げていく。逆に「サガシ」はAの部分の重なりを中心としてケハシに取り込まれ、意味用法が縮小する。つまり、地形の險阻なさまを表す点で「サガシ」とほぼ同じ意味用法を持つ「ケハシ」が現れることにより、それ以前は、比喩的に抽象的なものごとを形容する用法を持っていた「サガシ」は、その用法を「ケハシ」に譲ることとなる。和漢混淆文における両者の意味用法の違いは、この意味関係変化の過渡的状況として位置づけられよう。

ではなぜこのような意味関係の変化がおこったのだろうか。その要因の一つは、「ケハシ」が意味用法を広げる室町時

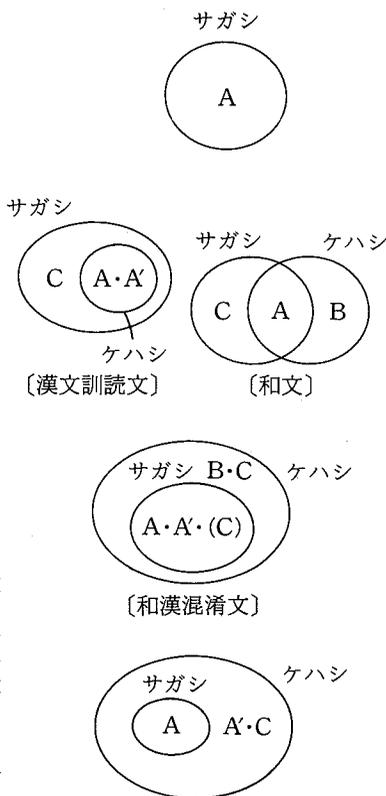
〈奈良〉

〈平安〉

〈鎌倉〉

〈室町〉

図3



- A 地形を形容する(地形の傾斜、起伏が激しいさま)
- A' 波、水流を形容する(波や流れの勢いが激しいさま)
- B 天候を形容する(風の勢いが激しいさま)
- C 抽象的事柄を形容する

代以前の、院政鎌倉時代の和漢混淆文における意味用法から、指摘できるのではないか。

「ケハシ」は、比喩的な用法を契機として意味用法を拡大した。⁽¹⁴⁾この、比喩的な用法は、「ケハシ」と表現されるような地形の状態が及ぼす、心理的作用から転用されると考えられる。つまり、地形にとどまらず、厳しさや激しさを感じさせるものに転用され、それが定着することにより、意味用法が拡大していくことになるのである。従って、和漢混淆文でみたように、「アヤフシ」や「オソロシ」といった、地形の険しさが及ぼす心理的作用としての、不安や恐怖などのマイナスの感情と結びつく性格を持つ「ケハシ」は、「サガシ」と比べて、比喩として他のものに転用されやすかつたの

ではないか。また、地形のように具象性の強いものの形態だけでなく、天候のように、目に見えず変化するもの状態を表すことができたため、後に、人の動作や性格など、抽象的なものの現れ方の形態を促え、表現する用法へと派生しやすかつたのではないか。

逆に「サガシ」は、和文で見られた、「危険事」を表すような比喩的用法が、中世以降見られなくなる。これは、中世以降の「サガシ」が、「ケハシ」に比べて、地形という、具象性の強いものを客観的に形容する用法が中心となり、抽象性の強いものには転用されなかつたことを示す。同じく地形の險阻なさまを表す「ケハシ」が現れ、しかもその「ケハシ」が、先述のように、より抽象的なものごとの様態へと派生、転用されやすい性格を持っていたため、中世においては「サガシ」の意味用法が限定されてしまう。あるいは既に、「サガシ」がより古い語、あるいは文章語として認識されたのではないか。⁽¹⁵⁾

このように、緊密な類義関係にあるいくつかの語彙が、通時的に見ると、一方が一方を取り込みながら拡大して行く関係にある場合、その過渡的な状況として、拡大する方は抽象度を増して多義となり、縮小する方は具象性を増して、意味用法が限定的になるという、一つの類型が考えられる。本稿では、そのような類型を持つ形状形容詞の、意味関係変化の要因を、主に感情表現と結びつくか否か、変化するものの様態を表すか否かという二点に帰着させ、指摘した。

国語史研究の中でも、体系的な研究が遅れている語彙史研究では、意味関係の変化、変遷の実態の記述は次第に盛んになってきたが、その類型性や、要因についての考察は、後回しにされることが多いのが現状である。本稿は、二語の意味関係変化の実態を、一類型として捉え、更にその要因について考察を加えることにより、今後の語彙史研究の一階梯として位置づけようとした。なお、古辞書、和歌を含むより多くの文献調査に基づき、より綿密な実証的分析と共に、文献に現れない事実への配慮等、残された課題は少なくない。また、このような意味関係の類型性を持つ語彙は他にどのようなものがあるか、他にどのような類型があるのか、今後更に考えていきたい。

注

(1) 「サガシ」の意味、用法、語源等に関しては、次のような御論考が存する。山田孝雄『国語の中に於ける漢語の研究』(昭和十五年四月、宝文館)、原田芳起『平安時代文学語彙の研究』(昭和三十七年九月、風間書房)、池田亀鑑「さが」「さがな」「たまさか」の語義」(『国語と国文学』二十四卷六号、昭和二十二年六月)、山崎馨「形容詞さかし・さがし者」(松村明教授還暦記念『国語学と国語史』所収)等。漢語「嵯峨」との関わりを含む語源研究が中心であり、類義語「ケハシ」との意味関係を考察する本稿とは視点と異にする。

(2) 次の文献をテキストとして用いた。(屋代本以下は影印)

覚一本(日本古典文学大系『平家物語』上下)、屋代本(貴重古典籍叢書『屋代本平家物語』昭和四十八年、角川書店)、平松家本(『平松家本平家物語』昭和六十三年、清文堂)、百二十句本(『百二十句本平家物語』昭和四十三年、汲古書院)、延慶本(『延慶本平家物語』昭和五十七年、汲古書院)、長門本(『内閣文庫蔵本長門本平家物語』昭和四十六年、芸林社)。

(3) 次の文献をテキストとして用いた。

神田本(太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』昭和五十七年、勉誠社)、天理本(天理図書館善本叢書『文選 趙志集 白氏文集』昭和五十五年、八木書店)。また、小林芳規『平安鎌倉 漢籍訓読の国語史的研究』昭和四十二年三月、東京大学出版会)第四章第四節第一項「神田本白氏文集の訓の類別」において、白氏文集当該箇所、現存訓点諸本の異同と、諸訓の性格及びその意味付けがなされている。

(4) 調査した文献は以下の通りである。

観智院本三宝絵詞(高橋仲幸^註『観智院三宝絵集成』昭55、笠間書院)、西南院蔵往生要集(西崎亨^{高野山西南院蔵}『往生要集』断簡)昭61、和泉書院、今昔物語集(岩波日本古典文学大系)、金沢文庫本仏教説話集(古典文庫、三教指帰注)築島裕・小林芳規『中山法華教寺本三教指帰注総索引及び研究』昭55、武蔵野書院)、法華百座聞書抄(小林芳規『法華百座聞書抄総索引』昭55、武蔵野書院)、古本説話集(山内洋一郎『古本説話集総索引』昭56、風間書房)、打聞集(東辻保和『打聞集の研究と総索引』昭55、清文堂)、図書寮本宝物集(昭4、古典保存会刊)、方丈記(青木侘子『広本略本方丈記総索引』昭40、武蔵野書院)、閑居友(峰岸明・王朝文学研究会『閑居友本文及び総索引』昭56、武蔵野書院)、海道記(江口正弘『海道記 語彙及び漢字索引』昭55、笠間書院)、光言句義釈聴集記(高山寺資料叢書『明恵上人資料第二』昭53、東京大学出版会)、唐物語(池田利夫『唐物語 校本及び総索引』昭50、笠間書院)、保元物語・平治物語・宇治拾遺物語・古今著聞集(岩波日本古典文学大系)、明恵上人夢記・却庵忘記(高山寺資料叢書『明恵上人資料第二』昭53、東京大学出版会)、東関紀行(江口正弘『東関紀行 本文

及び総索引』昭52、熊本女子大学国語学研究室、三帖和讃（親鸞聖人真蹟集成第三卷）昭49、法藏館、十訓抄（泉基博『十訓抄 本文と索引』）、新楽府注（来田隆「真福寺蔵新楽府注総索引（一）」——本文編・自立語索引編——）『鎌倉時代語研究』第二輯昭54）

なお、分析に採用した用例は、仮名書きされたもの、漢字に訓の付されたものに限った。また、右記テキスト以外に調べ得た諸本の異同は、できる限り記した（以下同じ）。

(5) 田山方南校閲・北野克写『名語記』（昭和五十八年、勉誠社）による。なお、「サガシ」については、天候を形容する用法の記述はなく、意味に関して「陰難ノ義」とあるのみである。

○次サカシトイヘルサカ如何 嵯峨也 峨々トサカシトモイヘリ陰難ノ義也反ニ、アラス（名語記 巻第六 15才）

(6) このような文脈において比喩的な用法が現れることは、「ケハシ」「サガシ」だけの問題ではなく、「道」という語の多義性、抽象性にも大きく関わりと考えられる。

(7) 両語に対する当時の言語意識（新旧、文章語・会話語等）が問題になろう。「陰阻なさま」を表す点では交換可能な語であると認識されたと考えられるが、一方で、先述の平家物語諸本での現れ方を見ると、読み本系では「サガシ」が用いられており、文体的特徴に関して示唆的である。

(8) 古事記（高木市之助・富山民蔵『古事記大成 索引篇』昭33、平凡社）、風土記・万葉集（岩波日本古典文学大系）。

(9) 調査した文献及びテキストは以下の通りである。

竹取物語（上坂信男『対照竹取物語語彙索引』昭55、笠間書院）、伊勢物語・大和物語（岩波日本古典文学大系）、土佐日記（小久保崇明・山田瑩徹『土佐日記本文及び語彙索引』昭56、笠間書院）、平中物語（曾田文雄『平中物語』研究と索引』昭60、淡水社）、多武峯少将物語（小久保崇明『多武峯少将物語本文及び総索引』昭47、笠間書院）、蜻蛉日記（佐伯梅友・伊牟田経久『訂正かげろふ日記総索引』昭56、風間書房）、宇津保物語、落津物語（岩波日本古典文学大系）、枕草子（田中重太郎『校本枕草子』昭28、49、古典文庫）、源氏物語（池田龜鑑『源氏物語大成』昭28、31、中央公論社）、和泉式部日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『和泉式部日記総索引』昭34、武蔵野書院）、紫式部日記・夜の寝覚（岩波日本古典文学大系）、更級日記（東節夫・塚原鉄雄・前田欣吾『更級日記総索引』昭31、武蔵野書院）、浜松中納言物語（岩波日本古典文学大系）、篁物語（小久保崇明『篁物語校本及び総索引』昭45、笠間書院）、狭衣物語（岩波日本古典文学大系）、讃岐典侍日記（今小路寛端・三谷幸子『校本讃岐典侍日記』昭42、初音書房）、栄花物語（高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語本文と索引』昭61、武蔵野書院）、大鏡（秋葉安太郎『大鏡の研究』昭36、桜楓社）、堤中納言物語（岩波日本古典文学大系）、とりかへばや物語（鈴

木弘道「とりかへばや物語の研究」昭48、笠間書院。

- (10) 和漢混濁文、漢文訓読文、また室町時代文献においては、このような「サガシ」は見られない。いわば、平安時代和文の会話文にのみ認められる意味用法といえる。文体、位相に関わる問題が存するように思われるが、詳しい調査、考察は後日を期したい。

- (11) 調査した文献及び本文は以下の通りである。

唐招提寺本金光明最勝王経（稻垣端穂「唐招提寺本金光明最勝王経」『訓点語と訓点資料』第一輯、昭29・4）、山田本妙法蓮華経（大坪併治「山田本妙法蓮華経古点」『同』第七輯、昭31・8）、小川本願経四分律（大坪併治「小川本願経四分律古点」『同』第九輯、昭33・1）、西大寺本金光明最勝王経（春日政治「西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究」昭44、勉誠社）、東大寺藏地藏十輪経・石山寺藏法華経文贊・石山寺藏大唐西域記・法華義疏・知恩院藏地藏十輪経（中田祝夫「古点本の国語学的研究」昭29、勉誠社）、正倉院本地藏十輪経（中田祝夫「正倉院本地藏十輪経卷五・七元慶点」昭55、勉誠社）、石山寺藏仏説太子須陀拏経（小林芳規・松本光隆・鈴木恵「訓点語と訓点資料」71・72合併号、昭59・5）、石山寺藏沙弥十戒威儀経（小林芳規「角筆文献の国語学的研究」昭62、汲古書院）、東大寺図書館藏百法頭幽抄（稻垣端穂「東大寺図書館藏百法頭幽抄」『訓点語と訓点資料』第五十八輯、昭53・5）、聖語藏弁中辺論（築島裕「聖語藏弁中辺論天曆点」『同』第一輯、昭29・4）、南海寄帰内法伝・龍光院藏妙法蓮華経（大坪併治「訓点資料の研究」昭43、風間書房）、東寺藏不動儀軌（月本雅幸「東寺不動儀軌」『訓点語と訓点資料』第六十五輯、昭51・11）、不空羼索神呪心経（小林芳規「西大寺本不空羼索神呪心経寛徳点の研究」『釈文と索引』『国語学』第三十三集、昭33・6）、大毘盧遮那成仏経疏（高山寺資料叢書「高山寺古訓点資料第三」昭61、東京大学出版会）、管見記紙背文選（山崎誠「文選巻二宮内庁書陵部藏」『管見記紙背文選』『鎌倉時代語研究』第七集、昭59・5）、立本寺本妙法蓮華経（門前正彦「立本寺本妙法蓮華経」『訓点語と訓点資料』別冊第四、昭43・12）、興福寺本大慈恩寺三藏法師伝（築島裕「興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究」昭40、東京大学出版会）、広島大学蔵八字文殊儀軌（井上親雄「広島大学蔵八字文殊儀軌古点」本文・校異・訳文——『訓点語と訓点資料』第三十九輯、昭43・10）、天理本論語・天理本莊子・天理本古文尚書・天理本文選（天理図書館善本叢書、昭55・57、八木書店）。

なお、漢籍と仏書とは区別すべきであるが、今回までの考察では、用例の量的偏りや、意味用法の有意差は認められないものとして、便宜上一律に扱うこととした。

- (12) 調査した文献及びテキストは以下の通りである。

閑吟集（岩波日本古典文学大系）、中華若木詩抄（勉誠社文庫）、四河入海・毛詩抄（岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』昭

46、清文堂)、御伽草子(岩波日本古典文学大系)、詩学大成抄(柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究』昭49、清文堂、天草版平家物語(江口正弘『天草版平家物語対照本文及び総索引』昭61、明治書院)、天草版伊曾保物語(大塚光信『キリシタン版『エソポのハブラス』私注』昭58、臨川書院)、虎明本狂言(北原保雄『大蔵虎明本狂言集の研究』昭47、表現社)。

(13) 本文は、土井忠生・森田武・長南美『邦訳日葡辞書』(昭和五十五年五月、岩波書店)による。

(14) 比喩的転用を契機として、用法が拡大し、多義となるような意味変化のし方については、国広哲弥『意味論の方法』(昭和五十七年、大修館書店)をはじめとする、先学の指摘がある。

(15) 注(7)参照。

(16) 小林隆「変化の要因としての語彙体系」(『国語学研究』24 昭和五十九年十二月)において、語彙の意味関係の変遷の実体を記述するだけでなく、その要因についての考察が重要であるとの御指摘がある。

(付記) 本稿は、第十八回鎌倉時代語研究会夏期研究集会(平成五年八月十二日)での口頭発表をもとにまとめたものである。席上、またその他の折に、小林芳規先生、菅原範夫先生をはじめとして多くの方々より貴重なご教示を賜った。記して深くお礼申し上げます。